

亀ヶ岡文化研究の現在

上條 信彦

●キーワード：亀ヶ岡文化 (Kamegaoka culture), 縄文晩期 (Final Jōmon), 遮光器土偶 (clay human figurine with goggle-type eyes), 漆器 (lacquer ware)

1. 亀ヶ岡文化とは

亀ヶ岡文化とは、今から約3,300~2,400年前の縄文時代晩期に、北海道南西部の渡島半島から東北地方一円に盛行した文化で、その名は、青森県つがる市木造地区の亀ヶ岡遺跡に由来する。山崎立朴編『永禄日記』(1778年)(館野越本, 元和9年の条)や菅江真澄『外浜奇勝』(1798年, 寛政10年)など江戸時代の数々の文献に記述が見られ、日本の考古学史上最も早く文献に登場する縄文遺跡として知られていた。そのほか、出土した遺物の一部は茶器として数寄者によって収集された。

明治年間になると、1889(明治19)年に設立された東京人類学会の神田孝平の仲介で、在野の蓑虫山人や佐藤部によって、遺跡の資料が紹介される。なかでも、教科書でおなじみの「遮光器」土偶は、亀ヶ岡文化を代表する遺物として紹介された。亀ヶ岡遺跡の資料は、当時の学界ではほとんど知られていない土偶などの祭祀的遺物や精巧な土器・漆器などの工芸的な遺物が特徴的であり、東京帝国大学の若林勝邦、佐藤傳蔵らを中心に研究・調査が行われた。これにより、亀ヶ岡遺跡をはじめ、文様などの独自性をもつ資料群から「亀ヶ岡文化」として、その名が定着し始める。

大正年間には、石田収蔵により青森県八戸市是川遺跡が調査された。その後も、泉山岩次郎・斐次郎兄弟の継続的な調査、1929(昭和4)年の大山柏ら大山史前学研究所の調査によって、「特殊泥炭層」からの多量の土器、石器、漆製品の出土が注目された。

岩手県大船渡市の大洞貝塚は、1925(大正14年)に長谷部言人・山内清男によって発掘され、とくに山内清男によって、各地点の貝塚はA・A', B, Cとアルファベット順に命名され、それぞれから出土した土器を標識にして縄文時代晩期全般の編年を示す大洞B, B-C, C1, C2, A, A'式と呼ぶ土器の諸型式が設定された。これにより、東北の縄文晩期を代表する亀ヶ岡文化に伴う土器型式が細分され、亀ヶ岡文化に伴う土器は大洞諸型式に細分化が進む。

また、亀ヶ岡文化はその独特な文様だけでなく、それを生み出した人々にも注目が向けられた。それは、明治年間の考古学界では原日本人論争が、活発化しており、亀ヶ岡遺跡もその中で取り上げられるようになったことである。そこに暮らしていた人々について、古アイヌ民族説やアイヌの説話に登場する小人であるとするコロボックル説などの議論が生まれ、「遮光器」土偶の由来もコロボックル説を提唱した坪井正五郎により、北方民族の民具から名づけられた。さらに、当時としては珍しい泥中からの遺物が出土したため、泥炭地遺跡(現在では低湿地遺跡として位置づけられる)として、生活立地についても議論が高まる。

大正年間以降も、以上の民族論、立地論を背景に、中谷治宇二郎や小岩井兼輝、吉田格、三田史学会などの調査が行われ、最終的に1982(昭和57)年日本文化財科学学会設立の契機となった文科省科学研究費特定研究「自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究」の「古環境」班による古環境復元調査まで、低湿地遺跡の形成過

程を知るうえで、重要な情報を提供し続けた。

2. 亀ヶ岡文化研究の課題と研究の視点

土器型式については、岩手県雨滝遺跡や同県・九年橋遺跡などの資料の増加によって、議論が重ねられ、東北部や北海道南部に盛行した土器群との対応関係も明らかになった。さらに、亀ヶ岡系土器は、北海道釧路市の幣舞遺跡や福岡市雀居遺跡からも検出され、北海道東部から九州北部までの広範囲にその情報が伝達していることが分かった。

亀ヶ岡文化は、寒冷期と温暖期の環境激変期にもあり、近年の AMS 放射性炭素年代測定法の進歩により、本州における狩猟採集社会と北部九州を中心に展開し始めた水稻農耕社会と接触期であったとも考えられている。こうしたなか亀ヶ岡文化の人々はこれらの環境激変に対して、新しい農作物の導入や資源の開発・物流拠点の形成という生業的・文化的適応を行うことで、その変化を乗り切ってきたと考えられる。亀ヶ岡文化を築いた人々が、どのような技術と社会を営んでおり、農耕化に向けてどのような基盤が形成されていったのか、精巧な土器・土製品や漆器とは裏腹に、実態が分かっていないことが多い。したがって、研究では、生業論と流通論をふまえることによって、新しい社会論を展開できると考える。

たとえば、土器型式からみると、亀ヶ岡式土器は文様の統一性が強いとされ、地域間交流の実態を検討することが難しいとされてきた。そこで、この地域の新しい取組みとして土器胎土中に含まれる、火山ガラスに注目した。火山ガラスは各火山の噴火年代によって、飛散した火山ガラスの形態や成分組成が異なる。近年の火山防災面からの研究が進展したことにより、火山ガラスの到達範囲が詳しく検討されてきていることが背景にある。土器製作に用いられる粘土のなかには、火山ガラスを含んでいるものがあり、粘土の供給源が明らかである。また、粘土そのものに含まれる鉱物であるだけに、混和材として別の場所から搬入された可能性は低い。

亀ヶ岡文化を特徴づける資料には、漆製品やアスファルト、ベンガラ・水銀朱などの鉱物、ヒスイ勾玉などの装飾品が挙げられる。現在、弘前大学人文学部北日本考古学研究所では、2011（平成 23）年度より縄文

晩期の低湿地遺跡である秋田県中山遺跡の調査のほか、東北を中心とする上記資料の資料調査を実施し、亀ヶ岡文化に関わる資源利用について研究を進めている。

亀ヶ岡文化を代表する漆製品は、青森県亀ヶ岡遺跡・是川中居遺跡・土井（1）遺跡・石郷遺跡・八幡崎（1）遺跡、秋田県中山遺跡・戸平川遺跡などで検出されている。もちろん、遺跡立地による残存状況の差や低湿地遺跡の調査数の違いも反映しているかもしれないが、他の時期や地域に比べ、突出して検出例が多い。是川中居遺跡では、彫刻の施された篋形木製品や石斧柄、白木弓、ヤス軸柄などの木製品のほかに、藍胎漆器や木胎漆器、樹皮製容器、赤漆塗り弓などの漆器が検出されている。さらに繊維製品、耳飾、腕輪なども特徴的である。

是川中居遺跡での自然科学的分析の結果、素材は木胎漆器がトチノキ、樹皮製容器がケヤキ樹皮、赤漆塗り弓がカバノキ属などで、それぞれの樹木特性を生かした素材選択がうかがえる。赤漆は、精製漆にベンガラや水銀朱などの顔料を混ぜ、炭粉を混ぜた黒漆を下地に重ね塗りされたとみられる。これら、漆製品に囲まれた生活を送っていたのが亀ヶ岡文化なのである。

漆製品はウルシ樹木の管理をはじめ、その製作には比較的高度な技術を要する。漆製品の製作については、ある集落で専門的に製作され、それが交易品として広範囲に流通していた場合と、拠点的な集落では、集落内に漆工芸に熟知した集団がおり、その集団によって製作、領域内で流通していた場合の二者が考えられている。

漆製品の製作を示す資料としては、ウルシ樹木・種実や、漆漉し布、漆入り土器などがある。それぞれの分布をみると、東北では少なくとも一部の地域や遺跡に偏って資料が検出されることはなく、条件がよければ、製作関連の資料を見出すことができる。また、低湿地遺跡を調査すると、開地遺跡では劣化して残らない、精緻な文様を施したいわゆる精製土器の多くには漆が塗られていたことを予測させる。そうした場合、漆製品の製作に熟知する集団が、ウルシ樹木の管理や漆の採取・精製、赤色顔料の調達などを、安定的に行うことができるような社会的背景があったと考えられる。この一連の実態についてはウルシの DNA 分析や、赤色顔料の材質・産地同定、断面観察による製作手順の解明などによって明らか

になることが期待される。

またアスファルトについては、従来秋田産のものが主流となって北海道から関東南部までの広範囲に流通していたと考えられていたが、新潟県大沢谷内遺跡など、産油地周辺の遺跡調査の進行とともに新たな展開が見えつつある。

3. 亀ヶ岡文化以後の東北

亀ヶ岡文化はやがて、水稲農耕文化との接触によって「弥生化」と呼ばれる新たなステージへ進む。その代表的な遺跡として津軽平野の砂沢遺跡と垂柳遺跡が挙げられる。これらの遺跡は完成された水稲農耕技術を受容しながらも、比較的短期間で集落が消滅してしまう。この変化の背景を探ることは、おそらく亀ヶ岡文化の消滅を探るうえで重要な手がかりをつかむことができると考えられる。

このような東北の水稲農耕の展開期と衰退期をみると、弥生前期、古代、中世、近世の大きく4つの段階がうかがえ、その段階は西日本よりも大きい振幅で進行しつ

つ現在に至ったと推察される。当然のことながら、温暖化と寒冷化という自然環境の変化が大きな要因となっているとみられるが、それでも世界的にみて水稲農耕の北限域で、水稲農耕が維持され続けた理由には、農耕技術の進化とともに、自然変化に適応できる多様な品種の開発があったと考えられる。亀ヶ岡文化の直後に東北北部で適応した品種とその背景にある技術の解明が、亀ヶ岡文化の衰退の解明にもつながると考えられる。

それぞれの時期にどのような品種が受容され、改良されていったのか探ることは、東北弥生時代にどのようなコメが受容されたか探るうえで重要である。出土米の研究は、佐藤敏也氏による一連の形態的研究から佐藤洋一郎氏ら古DNA分析にいたるまでの研究蓄積がある。弘前大学のプロジェクトでは、全国の自治体の出土米および、大阪府弥生文化博物館の佐藤敏也氏の収集資料の形態・DNA分析を開始したほか、資料分析により、新潟・岩手・青森の農業試験場との協力によって、在来品種の比較資料を集積している。将来的には出土米のデータベースを完成させる予定である。

(2014年6月5日受付, 2014年9月4日受理)

Current Research on Kamegaoka Culture

Nobuhiko KAMIJO

Faculty of Humanities, Hirosaki University

1 Bunkyo, Hirosaki, Aomori Prefecture 036-8560, Japan

Kamegaoka culture (*Kamegaoka bunka*) originated in the area surrounding what is now the Kamegaoka Archaeological Site in Tsugaru, Aomori, in northern Japan. During the Final Jōmon period, about 2,400-3,300 years ago, Kamegaoka culture flourished and expanded to cover the entire Tohoku area as well as southwestern Hokkaido. The Kamegaoka Site has long been recognized as one of Japan's oldest archaeological sites, being first mentioned in Edo-period books, and contains unique pottery artifacts. Various ethnic groups have produced characteristic objects, including distinctive designs on earthenware. The Kamegaoka culture, too, left behind many characteristic crafted artifacts, such as *shakōki-dogū* (clay human figurines with goggle-type eyes), stone objects, lacquerware, and animal bone objects, some of which might have been used in ritual ceremonies. This indicates that Kamegaoka culture had a developed relationship between humans and nature. The present special issue discusses the boundary of the Kamegaoka Site location and the area likely covered by the Kamegaoka culture, in light of frequent excavations of archaeological remains from a site located in water-bearing stratum as well as multiple excavations of special styles of earthenware assumed to have been distributed to wider areas. Kamegaoka culture developed during a period of drastic shift from a cool to warm global climate, during which paddy-rice agrarian societies came into contact with those in Honshu, where a hunter-gatherer lifestyle was more common. In these situations, inhabitants of the Kamegaoka Site survived through adaptations in their lifestyle and culture, such as the introduction of agriculture and development of resources based on physical distribution. This special issue presents the current status of research on Kamegaoka culture based on archaeology, geology, chemistry, molecular genetics, and conservation science of archaeological remains, and aims to contribute toward mutual understanding in the process by which the Jōmon hunter-gatherer culture transformed into the Yayoi farming culture.